

英国ルネサンス期のカーニヴァル現象

—スペンサー『薔薇の歌』から見える緩やかな「格下げ」について—

常 名 朗 央*

The Carnavalesque in the English Renaissance

—On the respectfully degraded Queen in Spenser's *The Song of the Rose*—

JONA Akio*

Abstract

Edmund Spenser's *The Song of the Rose*, appeared in *The Faerie Queene* (xii.74-75), is well-known as the typical verse symbolized as the Horace-originated theme, Carpe diem. In the verse, the Queen Elizabeth I is compared to a beautiful but mortal rose. The author tries to degrade the Queen into an English commoner, which represents the Carnavalesque occurred at the age of the English Renaissance in the mid-16th century. This thesis discusses the role of *the Song of the Rose* from the viewpoint of the theory of the Carnavalesque proposed by the Russian critic Mikhail Bakhtin.

キーワード：『薔薇の歌』、スペンサー、バフチン、カーニヴァル、『妖精の女王』

Keywords : *The Song of the Rose*, Edmund Spenser, Mikhail Bakhtin, Carnival, *The Faerie Queene*

1. 民衆のカーニヴァル

ミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin, 1895-1975) はその著書『ドストエフスキー論』において、初版 (1927) ではほとんど触れなかったカーニヴァルに対する論述を、30年以上の長い研鑽の成果として再版 (1963)、第三版 (1972) に挿入した。さらに「メニッポス風刺」と「ソクラテスとの対話」論を加えることによって、カーニヴァルの起源を遙かアテネの時代にまで遡らせた⁽¹⁾。現在のカーニヴァルは主にカトリック国における春の祭りであり、有名なりオやニースのカーニヴァルでは見世物、仮装行列、乱痴気騒ぎが行われ、多くの文学作品にもカーニヴァル=祭りの様子が見られる⁽²⁾。

文学世界においてカーニヴァル論を提唱したのは20世紀初頭のバフチンであったが、祭り・儀式としてのカーニヴァルは古代から存在しており、それは元々創作されたものではなく文明以前の村社会の誕生とほぼ同時に自然発生していたものである。資料として残されているカーニヴァルの一例はプラトンの『法律』で、人間を昏睡状況 (酒・麻薬類) に陥らせ踊りに熱狂させて人間的成長を促すという一見矛盾した「神聖な」行事 (ディオニュソス信仰) が紹介されている⁽³⁾。古代ローマ時代にはサトゥルナリア祭 (農神祭) がアテネのディオニュソス祭に取って代わった。この祭りは旧暦12月17日から7日間続くもので、奴隷と主人が食事を共にし、乱痴気騒ぎの祝宴が行われる。特に重要だったのはくじ引きで決められた祭りの王が君臨し、祭りが終わると王に似せて作った藁人形を焼く儀式で

*工学部英語系列非常勤講師 Part-time Lecturer, Department of English Language, School of Engineering

あった。この過程において、高い身分の者を一時的に亡き者にしてしまい、身分の下の者が短い間だが王位に就く。祭りが終わるとまた元のシステムが再生される。これは、王の「戴冠」と、およびその仕上げとして王位を奪う「奪冠」（王でなくなったものは罵られ、嘲笑される）がセットとなっており、この一時的な身分差の撤廃行事はカーニヴァルの典型を成す行事である⁽⁴⁾。

バフチンは『ラブレ論』で、民衆文化の一つであるカーニヴァルを宮廷文化への対立的要素と位置付けている。それと同時に、中世は、王侯貴族等支配者が決めた公式文化（宮廷文化）とカーニヴァルの民衆文化の両面が同時進行していた時代であり、この両面文化の融合こそがカーニヴァル化であるとバフチンは指摘している。ローマ以前の世界では、祭りを通じて民衆は神に近づくことを試みたが、キリスト教世界の神はその存在を信じ崇めることによつてのみ価値が生まれる。キリスト教の台頭により、民衆が祭りによって混ざり合う対象は、神から封建君主や宮廷の貴族へと変化し、17世紀に入ると民衆の祭りは支配者層（貴族・王侯・封建領主）によつて「公認化」されるようになった。祭りは、君主に対する不満のはけ口としての役割を持っていたが、逆に支配者側は祭りをパンとサーカスの役割として利用した⁽⁵⁾。

2. 公認の祭儀

中世ヨーロッパには2つの対立する祭儀があった。一つは民衆主体のカーニヴァル的な祭りであり、他は支配者層公認の祭儀である。バフチンによると、公認の祭儀は以下のようなものである。まず、祭りは現存体制を維持し、それを強化するための聖化された儀式である必要があった。公認の祭りにおいては、本質的に過去のみに固執して、不透明な、あるいは新勢力の可能性を示唆する未来を見てはいけない。現存の体制維持が、支配者層にとっての政治的・経済的・宗教的な普遍性を保証することにつながるため、祭儀は、現在確立された支配体制の維持に努める要素を持つことが重要になる。祭りにつきものの、厳格な規範や長年の伝統的な儀礼といったものは、変化を嫌い議論の余地を与えることを嫌う

支配者層の意識の表れである。

バフチンによると、公認祭儀とは、階級差別を助長して正当化し、不平等を「公認化」したものだという。さらに、中世において、公認祭儀を維持できたものは、垂直軸（社会的階層の上下）と水平軸（東西南北に及ぶ人的交流）という我々の社会を支える2つの軸のうち、上下を重んじる垂直軸が圧倒的に支配していたためであるとしている。「上昇・下降」という二項対立の図式がこの社会の価値判断の中に組み込まれ、その上、この上下の関係は不動のものと考えられていたのである。さらにバフチンは、水平軸での動きは「最良・最低」の判断が不可能なため、無駄な行為としてその価値を失ったと論じている⁽⁶⁾。

支配者層にとっては都合の良いことに、水平軸に沿って移動すると考えられた「時間」は本質的な意義を持たなかった。上下に動く垂直軸には時間の概念が存在しない。従つて、時間の経過による進歩や劣化も存在しないので、現存の支配者層による秩序は永遠であった⁽⁷⁾。

3. カーニヴァルの役割

民衆のカーニヴァルは支配者層から公認された祭儀の対極に位置していた。バフチンはカーニヴァルこそ民衆にとっての重要な表現手段であったとしている。その特徴は、まず、あらゆる階層・階級を撤廃することである。支配者層は公認祭儀を通じて制度の「永遠化」を図ったが、過去しか見ない支配者層に対して、民衆は完了しない未来を見ようと努めた。もう一つは、支配者層を民衆の中に取り込むことである。そこから生じる混乱、乱暴狼藉、狂乱を通して生まれる言葉、音楽、舞踊などの表現手段をバフチンは象徴的に「カーニヴァル言語」と定義している。最後の特徴はカーニヴァルを通じた身分を超越した普遍的な「笑い」である。中世以降民衆のカーニヴァルは教会や王侯勢力をも引き込み、祭りは支配者層「公認」のものに変わっていった。

民衆も為政者も「公認」された祭儀をそれぞれが利用して楽しんだことは先ほど述べたが、支配者層から公認されたカーニヴァルによる民衆文化は、フィレンツェ発のルネサンスの影響が大きいことを忘

れてはいけない。これまで説明したバフチン提唱のカーニヴァル現象は、16～17世紀のイングランド・ルネサンス期においても発生していて、イングランド文人たちの革命的な表現技法の変化は、反ペトラルキズムという名のもとで進められていった。

4. ペトラルカソネット

ルネサンスとは何かを一言で表現するのは困難であるが、敢えて言えば、神中心から人間中心への思想の変化である。14世紀フィレンツェのダンテより始まったルネサンス運動は聖書の解釈に捕らわれない自由な表現を重んじたことで、ヨーロッパ各都市に広がった。遠い辺境の地イングランドでのルネサンスは、16世紀中旬ヘンリー8世の時代に、外交官たちがイタリアの宮廷にてペトラルカのソネット集 (*Canzoniere*) を本国に持ち帰ったところから始まった。後に古臭いとして放棄されるペトラルカが、当時の詩人たちにとってはルネサンスそのものであった。

人間を自由に表現する時代に入ったことで、詩人たちはペトラルカのスタイルを模倣して、それぞれが理想の女性像を作り上げ、甘い言葉で相手を褒め称えるソネットを創作していった。だがやがて、純粋に貞節な女性を歌い上げる表現は限界に達した。スペンサーの盟友シドニーも自身のソネットで、いつまでもペトラルカ式に頼っている自身に疑問を投げかけている。ペトラルカ式の恋愛ソネットが廃れた理由は、まず単純に古くなっていったこと、さらにはイングランド人の合理精神が割に合わない(絶対に成就してはいけない)恋愛を歌に詠むことが出来なくなったからだと思われる。但しこれはルネサンス運動の否定ではない。徐々に大国の仲間入りを果たしつつあったイングランドは他国の様々な文化を取り入れる機会を得た。ペトラルカに対する否定はイングランド詩人に顕著にみられた現象であるが⁸⁾、ダンテの『新生』やペトラルカの『凱旋』は翻訳されて女王を始め多くの人に読まれていた事実を考えると、フィレンツェへの憧憬はあったといえるであろう。

5. スペンサー「薔薇の歌」

バフチンによると、17～19世紀の文学の基本典拠になったのは、ルネサンス期の作家たち、ボッカチオ、ラブレー、シェイクスピア、セルバンテス等であった⁹⁾。また、カーニヴァル化は演劇よりも小説での表現が困難であるとしているが、これは詩に当てはめてみればなおさらであろう。つまり、民衆と支配者層の衝突や融合が起こるカーニヴァルを、作者の一人語りが主体の詩の世界で表現することは困難であるからだ。シェイクスピアのカーニヴァル化の例は、『夏の世の夢』におけるタイタニアとボトムの話¹⁰⁾や、『ロミオとジュリエット』での乳母の狂乱ぶりなど¹¹⁾枚挙にいとまがないが、今回は特にエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552?-59) の『妖精の女王』 (*Faerie Queene*) ¹²⁾ から「薔薇の歌」 (*The Song of the Rose*) を取り上げ、作品のカーニヴァル化について考察する。

スペンサーは長編叙事詩『妖精の女王』を1589～91年にかけてエリザベス1世に捧げている。本作品は典型的な中世伝統の騎士道物語であり、アーサー王物語を下地にした寓意ロマンスである。エリザベス1世を暗示するグロリアーナ (Gloriana) を中心にして、12の徳を持った騎士たちが栄光を求めて遍歴の旅を続ける (作品は未完で実際は6つ)。『薔薇の歌』は『妖精の女王』第2巻「騎士サー・ガイアの節制の物語」内に収められている。以下が第2巻の主なあらすじである。

騎士ガイアはアーサー (後のアーサー王) と旅をし、途中「狂気」の騎士を倒した後、アーサーとは別行動を取り、地獄を巡り多くの試練に耐える。「節制の館」でブリテン史を学び、巡礼と共に船で至福の国へ。多くの快樂に打ち勝ち、最後に魔女アクレイジア隠れ家へ向かい、魔女を不意打ちで打ち倒す。『薔薇の歌』は魔女と対決する直前にどこからともなく聞こえてくる。以下全文である。

The whiles some one did chaunt this louely lay;
Ah see, who so faire thing doest faine to see,
In springing flowre the image of thy day;
Ah see the Virgin Rose, how sweetly shee
Doth first peepe forth with bashfull modestee,

That fairer seemes, the lesse ye see her may;
Lo see soone after, how more bold and free
Her bared bosome she doth broad display;
Loe see soone after, how she fades, and falles away.

So passeth, in the passing of a day,
Of mortall life the leafe, the bud, the flowre,
Ne more doth flourish after first decay,
That earst was sought to decke both bed and bowre,
Of many a Ladie, and many a Paramowre:
Gather therefore the Rose, whilst yet is prime,
For soone comes age, that will her pride deflowre:
Gather the Rose of love, whilst yet is time,
Whilst louing thou mayst loued be with equall crime.
(*The song of the Rose*. II. xii. 74–75)⁽¹³⁾

その間にも、誰かが次のような甘い唄を歌っていた。/ 美しいものを見たい、いや、澆漑と咲く花のうちに / 自分の華々しい一生の姿が見出せる、と思う人は、見るがいい / 乙女のようににはにかむ薔薇の花を見るがいい。初めのうちは / しおらしげにそっと外の様子を窺いながらほころび始める、/ 人の目につかなければつかぬほど、その色つやもひとしおだ。/ だが、あっというまに、彼女は大胆不敵になり、/ 人目も憚らず裸の胸元を掲げる始末だ。/ そして、忽ち色あせ、萎み、朽ち果てている。

こんな風に一日は過ぎ去り、こんな風に / 人の一生は、その緑の葉は、蕾は、そして花は過ぎていく。/ 多くの美女の、そして多くの男たちの / 寝床を飾り、閨房を飾るために求められた花も、/ ひとたび萎めば二度と咲くことはできないのだ。/ だから、春の盛りのすぎぬ間に、薔薇の花を摘むがいい、/ 花のおごりを散らす老齡がすぐにもやってくるからだ。/ まだ時がある間に、うしろめたくても愛し愛される時が、/ まだある間に、恋の薔薇の花を摘むがいい。

『妖精の女王』はエリザベス 1 世に捧げられた作品であり、作中のグロリアーナとは女王本人を指し

ている。ルネサンス期において、作品の最高位の地位は神に限定されなくなった。叙事詩や演劇において、神なき世界が許されればその対象は多岐にわたるようになる。『テンペスト』のプロスペロ然り、『妖精の女王』ではグロリアーナ（暗にエリザベス女王を示唆している）がそれに当てはまる。作中ではグロリアーナの栄光のために騎士たちが獅子奮迅の活躍を披露する。そこには報酬もねぎらいの言葉もほぼなく、騎士はただ榮譽のためだけに竜や魔女と戦う。その点だけは『妖精の女王』は愛に殉ずる騎士達の話というペトラルカ風ソネットと類似している。騎士道物語にはストイックなストーリー展開が不可欠だからであろう。

上記の 9 行 2 連の短い詩句⁽¹⁴⁾は突然聞こえてくる。「誰かが次のような甘い唄を歌っていた」（傍点は筆者）と断ったうえで作品内容とは全く関係なく語られるのである。その内容は、最初の 9 連は薔薇の花を擬人化しており、その誕生と美しく咲く様、そして最後にはあっけなく朽ちて枯れてしまうことを詠い、後半の 9 行では人生は短いもの、だから美しい姿を短い人生の中で謳歌せよ、と訴えている。当然女性に対しての歌なのだが、魔女アクレイジアでも節制の館のアルマに対してでもない。この歌は、グロリアーナではなく、エリザベス女王本人に対して歌ったのではないかと考えられる。女性を美しい薔薇の花に例える手法はペトラルカ風ソネットの伝統そのものであるが、その場合はただ相手の美しさを褒め称えれば十分であって、儂く散るという表現は相応しくない。ペトラルカ風ソネットであればその永遠性を訴えるべきある。さらに、もし女王の美しさを称えるのであれば、このような何でもない位置に置くのは避けるべきであり、一国の女王に対する賛辞として序文⁽¹⁵⁾に加えるべきである。

従って、この箇所では一時的に女王の「奪冠」が行われ、女王を作者と同じ目線にして歌いかける「格下げ」が起きていると考えてよいのではないか。その効果は、仰々しさを省き、騎士道物語というファンタジーの中での具現化現象により作品の意外性を見せているのではないか。また、女王の平民への「格下げ」は、人間讃歌を掲げるルネサンス運動そのものを体現しているといえる。とはいえ、女王を堂々と「格下げ」して、「忽ち色あせ、萎み、朽ち

果てる」薔薇に例えるのは不謹慎であるので、誰が誰に歌ったか分からない状況を作り出したのはイングランド王室への配慮と考えられる。

6. 終わりに

以上、叙事詩に見えるカーニヴァル化についての考察を行った。「薔薇の歌」の1連後半の僅か3行で、薔薇を人に見立て、生まれて死ぬ様子を巧みに表現した描写は、この歌のテーマといわれる「カルペ・ディエム」⁽¹⁶⁾そのものだが、薔薇の花とはいえ、生と死の循環は「奪冠」と「戴冠」を繰り返すカーニヴァルそのものである。「薔薇の歌」を序文に置かずに途中の重要でない位置に挿入したことも女王の「格下げ」、つまりカーニヴァル化と言え。女王に歌いかけている「薔薇の歌」の場面では、物語は一時的に停止する。つまり支配者(=女王)の前では世界は垂直軸にしか働かないのである。ただし、こうした格下げも、乱痴気騒ぎ、狂乱も、カーニヴァル化は緩やかに行うことが女王に対する最低限の礼儀作法である。それは騎士として当然の振舞であらう。

注

- (1) バフチンは『ドストエフスキー論』を再版するにあたって、第1部、第4章の大幅な加筆・修正をおこない、ポリフォニー論・カーニヴァル論を深く掘り下げている。和訳は『ドストエフスキー論—創作方法の諸問題』(新谷敬三郎訳、冬樹社、1974年)
- (2) 民衆レベルのカーニヴァルの様子に関しては、『忠臣蔵とは何か』(丸谷才一、講談社文芸文庫、1988年)や『祭りと叛乱』(イブ・マリー・ベルセ、井上幸治訳、新評論、1980年)が詳しい。
- (3) 「神々は、ただ苦しむためだけに生まれた人間を憐れみ、労働からの休息時間となるように、宗教的祝祭という息抜きを与えた。神々は、我々とともに浮かれ騒ぐ仲間として、アポロンに従うムーサたち、そしてディオニュソスを与えた。人間が神々と祝祭をとともにすることで、その生き方を取り戻すことができるようにしたのである。」(プラトン『法律』上巻、森進一・池田美恵・加来彰俊訳、岩波文庫、92ページ)
- (4) 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』(川端香男里訳、せりか書房、1972年、新版1988年)。以下『ラブレー論』
- (5) 例えば、1649-53年のフロンドの乱の最中に行われた祭り(カーニヴァル)では、「当事者」のマザラン卿に似せた藁人形が何度も「火刑・斬首」にされたという(『祭りと叛乱』)。
- (6) 『ラブレー論』(第1章)
- (7) 『バフチン—対話とカーニヴァル』(北岡誠司、講談社—現代思想の冒険者たち第10巻、1998年)第4章、及びエピソードを参照
- (8) シェイクスピアのペトラルカに対する嘲笑は露骨であるが、ペトラルカからの完全な決別と、イングランド式ソネットの誕生を示唆しているといえる。拙著『英国ルネサンス期のカーニヴァル化についての考察』(『湘南英文学』第12号、2017)。シェイクスピアはペトラルカだけではなく、古代からの悲劇的な恋愛物語をマキューシオの言葉を借りて揶揄している。(『ロミオとジュリエット』第2幕第4場34-40)
- (9) 『ドストエフスキーの詩学』(望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、1995年)317ページ
- (10) Jan Kott, *The Bottom Translation* (Japan: Heibonsha, 1989) Ch2.
- (11) 『シェイクスピアとカーニヴァル』(ロナルド・ノウルズ編、岩崎宗治、加藤洋介、小西章典訳、法政大学出版局、2003)第2章参照
- (12) 第1~3巻が1589~91年女王に謹呈され、4~6巻と7巻の一部が1596年に出版された。作品は未完とされるが1~7巻の一部までが作者の死後1619年に出版された。
- (13) Hamilton, A. C., ed. and Hiroshi Yamashita, Toshiyuki Suzuki, text ed. *The faerie queene / Edmund Spenser*; (London Pearson Education, 2001) 日本語訳は、平井正穂編『イギリス名詩選』(岩波文庫、1990)を参照。
- (14) スペンサーはタッソー (Torquato Tasso, 1544-95) の『エルサレム解放』(*Gerusalemme Liberata*, 1580)16・14-15の翻訳から『薔薇の歌』を作成している。
- (15) 序文では女王の名声の永遠性 (THE ETERNITIE OF HER FAME) を願っている。
- (16) ホラティウス『歌集』第1巻第11歌の *Carpe Diem* (今を楽しめ) というテーマの典型表現といわれている。

